

武蔵野日曜集会

恵信

——ローマ書第5章1～11節——

1996年4月14日(武蔵野)

小池辰雄

魂の世界 指輪の宝石 信仰義認 霊界の太陽 神交 恩恵 聖意体現者 流れる水 活かす
本 キリストに在りて お葬式で「おめでとうございます」 上からくる希望

【ロマ5:1～11】

1斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに頼り、神に対して平和を得たり。2また彼により信仰によりて今、立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。3然のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、4忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり。5希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。6我等のなお弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて敬虔ならぬ者のために死に給えり。7それ義人のために死ぬるもの殆どなし、仁者のためには死ぬることを厭わぬ者もやあらん。8然れど我等がなお罪人たりし時、キリスト我等のために死に給いしに由りて、神は我らに対する愛をあらわし給えり。9斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんに、まして彼によりて怒より救われざらんや。10我等もし敵たりしとき御子の死に頼りて神と和らぐことを得たらんには、まして和らぎて後その生命によりて救われざらんや。11然のみならず今われらに和睦を得させ給える我らの主イエス・キリストに頼りて神を喜ぶなり。

●魂の世界

福音は水を割つたらだめです。こちらの、福音によるところの魂の響きが相手に移るんです。今、日本で一番欠けているのは魂の世界です。魂の世界をいいかげんにしている。日本の精神情況は、これではいつまでたつてもだめです。学校の先生自身がヨーロッパ文化の一番の根源であるところの聖書を——信仰するとしなないとにかかわらず——読んでいないということは大きな欠陥です。そういう意味において、日本の教育には期待するわけにはいかない。

そういう魂の育て方はむしろお母さん方の使命になる。福音をお持ちの方はどうぞ、自



分の子であろうと人の子であろうと、折りにふれて聖書の話をしたり、また、聖書を読みなさいということを遠慮なくおっしゃったらいいます。

聖書をそこらの本屋で売ってない。それが困る。それだけ、本屋さん自身がだめなんです。欧米では、聖書は出版物のうちで最大の数を持っている。そういうことは、非常に日本では欠けている。ですから、聖書を読み福音を身につけている方々は遠慮なしにそうやって勧められたいと思います。

●指輪の宝石

今日はローマ書5章から始めます。パウロは当時の世界の最大の都ローマに対して、どうしても福音を伝えなくてはいかんという念願をもっていた。そして、パウロは本当に――ペテロも行きましたけれども――ローマに乗り込んで行ってやったところが、やはり迫害にあつて、どうもパウロもペテロも道に殉じた死に方をしたらしい。ネロなんていう悪い皇帝がいましたからね。

ローマ書は新約聖書の、ある意味においては中心です。大変なもんです。内村鑑三先生が、「新約聖書が指輪だとすると、ローマ書はダイヤモンドの宝石みたいなところだ」と言われた。それくらい、ローマ書というのは大事なパウロの書翰です。これはよく熟読するといい。マルチン・ルターの『ローマ書の解説』という素晴らしい本がある。それくらいローマ書というのは新約の非常に大事な中心的な書翰です。パウロはいくつも手紙を書きましたが、みなこれは大事な手紙です。

●信仰義認

「斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに

頼り、神に対して平和を得たり。

これは「平和」ではいかん。平安です。「平安を得たり」です。

「信仰によりて義とせられた」

という言葉は、私は内村鑑三先生や藤井武先生の集会でさんざん聞かされた言葉です。「信仰義認」という。義と認められる。けれども、「信仰によりて義とせられた」ということの、もうひとつ前に大事なものは恩恵めぐみなんです。恩恵が土台です。信仰は恩恵によって、恩恵の土台の上に築かれるもので、人間の信仰の側が先ではない。キリストの恩恵が先です。キリスト自身が恩恵の主体です。

「恵さゝか福ふくなるかな、心こゝろ（霊）の貧しき者。天国はその人のものなり。」（マタイ5:3）

という。あの「心」というのは本当はギリシア語の「霊」（プネウマ）という字です。「さいわい」（マカリオイ）という字はただいわゆる「おめでたい」意味の幸いではない。「恵福」と訳した方がいい。キリスト自身が恵みの主体ですから。



ところが、キリストは

「私は何事もできない、何も言えない」

と、ヨハネ伝に書いてある。

「イエス答えて言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行うほかは自ら何事をも為し得ず、父のなし給うことは子もまた同じく為すなり。』(ヨハネ5・19)」

「神さまの為すところ見て、そしてやっているんだ」

という。完全に霊の世界です。その霊の世界の事態が相対的な目に見え耳に聞くところの行為に、神さまはいろいろなものを使ってなさるわけです。「子は父のなし給うことを見て行う」とはそういうわけです。自然界でもそうです。太陽の光や風がする自然のわざがある。それで、風や太陽の光の素晴らしさを知るわけです。

●霊界の太陽

私はこないだ伊豆の家に行った。家の二階から太平洋が見える。太陽が水平線から昇ってくるのが見える。いや大変なもんだね。太陽の光というものは万物を照破する。だから、お天道さまを見て、これに拝む人たちもあるわけです。一向差し支えない。ゲートルが亡くなる二週間前に、

「自分はキリストと太陽の前には無条件に頭をさげる」

と言った。キリストは霊界の太陽だ。自然界の太陽と天界の太陽には無条件に頭を下げると言った。さすがはゲートルだね。

そういうことを告白するような文学者がこの日本にいるかというんだ。だめだね。偉大なるものの前に無条件に頭を下げるような人が日本の明治以降の文学者の中にいないではないですか。夏目漱石だってだめだね。

これは本当は日本の教育者の責任なんだ。教育者自身が東洋の古典とか、西洋の古典である聖書とか、そういうものを本当に読んでいない。中国の老子でも少し読んだらいい。老子の書いたものはそう多くない。全部読めるくらいです。孔子は「老子は竜のごとし」と言つて、老子にはとてもかなわないと言った。老子は大きな人間です、凄いです。「道なき道」ということを言った人ですね。

●神交

「斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、」

「義とされる」という言葉がよく出てくる。「信仰義認」という。けれども、私には「信仰」なんかない。信じ仰いでなんかない。神との交わり、「神交」です。キリストと一つになる。キリストは



「我を見し者は父を見しなり」

と言った。キリストは神さまと同じなんだ。

「私を見た者は神を見たのと同じことだ」

と。実は、自分がゼロなんだ。キリストは

「自分は何も言えない、何もできない」

と言ったんだから。

「我何ごとをも為しあたわず。何も教えやしない。神さまが言えということを

言っているだけのなしだ」

と。キリストはゼロなんだ。ゼロだと、神という無限大が入ってくる。キリストとはそういう人なんだ。だから、キリストのことを「無者」という。無き人、何も無いひと。ところが、無者は「無限無量者」なんだ。神さまが入ってくるから。何も無いところに神さまが入ってくる。

この部屋は今、電灯がともっているけれども、本当は太陽の光が入ってそして照らすわけだ。闇を光の世界にするのはお天道さんなんだ。朝、お天道さんが上ってくると、今までの闇が全部なくなってしまうって、朝日の光で明るくなるでしょ。露が光りだす。ダイヤモンドのように光る。朝露の光るのを見ていると、あれはダイヤモンド以上だね、いろいろな光に光る。どんな宝石もかなわない。

神交です。信じ仰いでなんかいない。私は

「信仰なんかありませんよ」

と言う。神交わりです。キリストの中に自分を投げ入れるわけです。

「我を見し者は父を見しなり」

と言うイエス・キリストの中に投げ入れる。私の祈りはそういう祈りです。キリストの中に自分を投身する。心ではない。身なんです。瞑想しながら、全存在をキリストの中に投げ入れるのが私の祈りの秘訣なんです。そしてキリストと一つになってごらん下さい。力がくるから。本当に力がくるから。そういうような瞑想をしなければだめなんだよな。キリストと一つになって力が来て、それから、本を読もうが、何か書こうが、それが原動力だからね。それが本当の神交わりの世界です。信じ仰いでなんかいない。神交わりの世界です。こんなことを普通の教会の牧師さんは言わないだろうね。私はお説教なんかしない。自分の全身に満ちていることでなければものを言わない。頭でなんかでものを言わないから。そういう世界が神交わりの世界、キリスト交わりの世界です。

●恩恵

ヨハネ伝の1章1節は素晴らしい言葉だね。

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。」(ヨハネ1:1)



「太初にロゴスがあつた、ロゴスは神と偕にあつた。ロゴスは神であつた」という。ギリシヤ語の「ロゴス」はただ「言」と訳してはだめなんです。「言」では、訳が平板でだめです。

「太初に靈言あり」

と訳す。ロゴスは靈言、とても訳さなければだめなんです。明治6年くらいの翻訳に、

「太初に道あり」

と訳した。ロゴスを「道」と訳した。なかなか大した訳だ。道は自分で歩かなければ分らない。「見たつてしょうがない。実践しろ、本当に歩け」ということだ。そのロゴス是一体何かというと、キリストのことになっている。これはキリストとして現れた。

「言は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我らその栄光を見たり、実に父の独子の栄光にして恩恵と真理とにて満てり。」(ヨハネ1・14)

これはキリストのことです。だから、イエス・キリストに圧倒されていなければ。私はキリストに圧倒されて生きている。信仰ではありません。それだけの話です。私はキリストの力に圧倒されるから、その力が入ってくる。キリストの力が、智慧が、生命が入ってくる。そういう活けるキリスト、我々を活かすキリストです。

「信仰によって義とされる」

と特に書いてある。そうすると、みんな信仰がなにものかと思う。そうではない。恩恵から信仰ができてくる。信仰の基にはキリストという恩恵の主体があつたことを忘れてはいかん。

「私は信仰なんかありません、恩恵で生きています、キリストの絶対恩寵で生きています」

ということですよ。パウロさんもこういう間違いやすい言い方をして困るよ、「信仰によりて義とされた」なんて。「義」という言葉は、旧約からもよく出てくる。むしろ、義なんていわなくて、

「信仰によってよしとされた」

で結構なんだ。キリストという恩恵を受けとって、そして義とされる。義という言葉は「正義」の意味ではない。人間の魂の在り方の中心は、脊椎骨は義です。キリストを受けとることによって義とされる。

●聖意体現者

「義人なし、一人だになし」(ロマ3・10)

とパウロが言った。義人という者は一人もない。ただイエス・キリストだけが義人だという。神さまの御意をそのまま現するひとを義人という。御意の体現者、聖意体現者です。神さまの聖なる意志を全存在で現する。聖意体現者が義人なんです。この聖意体現者はキ



リストのほかにはない。「義人なし、一人だになし」とパウロが言ったのはそのことなんです。パウロというのはもともとキリストを信ずる者に逆らっていたやつだからね。ダマスコ途上で復活のキリストが現れて、パウロはひっくり返された。

「パウロ、パウロ、なんぞ我を迫害するか」(使徒行伝9:4)

と。「我を」というのは、「私を信じている者たちを」ということです。パウロは三日三晩、目が見えず、ものが食べられず、アナニヤという信者に按手されて、やっと目が醒めた。パウロさんはもともとそういう人だ。パウロは反キリストだったんだね。アンチ・クリストが今度はこのクリスチャンになった。キリスト者の第一人者になった。180度の質的転換をしてしまった。

牢屋に入った悪者が牢屋の中で聖書を読んで、

「いやこれは大変な本だ。私はこれに救われた」

と言ったら、牢屋から出してやったらいい。そういう獄吏なんてものはいないね。もしよければ、私はどこの牢屋に行つたつて、聖書の話をしてやる。「今日は面白い話をあなた方に聞かせるよ」と言つてね。それくらいのことを本当にやってみたいね。

●流れる水

あなた方一人びとりはみな伝道者ですよ。どういう人でもいいから、

「来たりて見よ」

と言つて、聖書の世界に入れてあげなさい。私の集会に連れて来たつて一向差し支えない。なにしろ、日本人の精神状態は抛り所がないんだからね。しょうがないよ。あなた方は、福音をもっていることは、必ず人に伝える義務と栄光がある。それをやらないと、あなた方自身がくさってしまう。よほど水はだめなんだ、流れる水でなければ。人に流していかなければ。皆さんは一人びとりが伝道者ですから、

「この福音の世界を伝えないではいられません」

と、大いにやってください。

皆さん、毎日、聖書を読みますか。「めんどくさい」ではだめだよ。聖書はどんな小説よりも楽しい本だから。これは一番楽しい本です。こんな楽しい本はない。読んでいるうちに力が来てしまうんだからね。聖書を読んでいて力が来なかつたら、それは読んでいるんじゃない。それは字面をただ目で運んでいるだけのはなしです。

「わが言は霊なり生命なり」

なんだから、キリストの言は霊であり生命であるんだから、霊と生命を、読んでいて受けとらなかつたら、実は聖書を読んでいることにならない。

イエス・キリストは天界からそこの教会を見ていて、「しょうがないな」なんて、嘆いているかもしれないね。キリストに誉められなければだめですよ、人に誉められたんでは。



どうぞ、皆さん、人にどう思われようとも構わないから、キリストが歎びたもう、キリストが誉めたもう在り方であってください。

人間だから、躓いたり転んだりするよ。いいよ、躓いても転んでも。何も立派な人間になる必要はない。キリストは相対的な人間の立派さなんか考えてない。マグダラのマリヤみたいに、七つの悪鬼を追い出されたあの女性がキリストにナルドの香油を注いだ。全身でもつての気持ちで注いだら、キリストは本当に喜ばれた。

「私の葬りの備えをしてくれた」と言ってね。

●活かす本

キリストはまた霊体として現れた。「復活」というのは「また生き返った」ということではない。霊体のキリストとして現れた。パウロがコリント前書15章で、「血気の体あり、霊の体あり」と言った、あの「霊の体」、霊体です。

「天上の体あり、地上の体あり、されど天上の物の光榮は地上の物と異なり。

……血気の体にて播かれ、霊の体に甦えらせられん。血気の体ある如く、ま

た霊の体あり。」(コリント前書15・40…44)

とある。

聖書くらい楽しい本はないんだ。毎日、御飯はみな食べるけれども、聖書を読むことを忘れては困るよ。御飯を忘れても、聖書を読まなければ。

「私は食べないけれども、聖書を読んでいたらお腹がいっぱいになりました」

と、それくらいの気持ちでやってください。みんな、聖書はなにか難しい教えの本だと思っっている。絶対に教えるではない。聖書は活ける文字、活かす文字だから。聖書なんて言わないで、「活かす本」と言ったらいい。人を本当に活かす本です。

ギリシヤ語やヘブライ語でなくていい。日本語で一向差し支えない。神の根源語というのはギリシヤ語でもヘブライ語でもない。あるひとつの響きなんだ。音楽みたいなものだ。響きの世界です。だから、音楽というのは素晴らしい。あの響きでもって、人間の魂の世界をあらわしている。だから、作曲家というのは素晴らしいね。ベートーヴェンでもシューベルトでもバッハでも。聖書は音楽の世界です。

ベートーヴェンの第九シンフォニーの終りの方にはシラーの詩が出てくるけれども、あのところは素晴らしい。この頃、歳の暮れにやらないね。だめだね、日本は。ああいうのはしっかりやらなければ。だんだん精神的に頹落してきたな。古典を重んじなければだめなんだ。東西古今の古典的なものを、文学にしろ、音楽にしろ。薄っぺらなものを読んでいたってだめなんだ。あなた方は、そういう意味で、福音的な角度から大いに戦ってください。



●キリストに在りて

私たちはキリストという恵みを受けとつて——「信仰」とは「受けとる」ということ——その受けとることによつて義とされた。よろしいとされた。

¹斯く我ら信仰によりて義とせられたれば、我らの主イエス・キリストに頼り、神に対して平和を得たり。

「我々のイエス・キリストに在りて、神に対して平安を得た。」

ということですよ。「キリストによりて」でもいいけれども、本当は「キリストに在りて」のほうがいい。キリストの中に入らなければだめなんだから。ただ手段、方法ではない。気持ちは「に在つて」なんだけれども、ギリシヤ語は「よつて」になっている。パウロさんの言い方も少しもの足りないけれども仕方がない。

「信仰」という言葉は、それを受けとる、「体受」、身体で受けとることです。神との関係は平安です。平和というのは人間と人間との関係です。本当の平安を各人がもたなければ、本当の平和はこない。

²また彼により信仰によりて今、立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶなり。

それは本当は

「恩恵の主体を受けとることによつて、恩恵の中に入った」ということです。「恩恵より出て、恩恵に帰る」ということだ。

ローマ書8章に、

「⁸また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。

「肉に居る者」とは生まれつきの自分ということです。それはだめだと。

⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

聖霊が入ってくれば、霊の世界、聖霊の世界であると。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。

もう、はつきり言っているな。

¹⁰若しキリスト汝らに在まさは^{いまからだ}体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在る。¹¹若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿りたもう御霊によりて汝らの死ぬべき^{からだ}体をも活かし給う。」(ロマ8・8～11)

はつきり言っているね。

●お葬式で「おめでとつています」

だから、ヒルテイーも言っているとおり、我々は死なないんだ。



「次の世界に行く」

ということですよ。まさに日本語の「往生」です。往きて生きるんです。私がこの世から去るときには、「小池先生は死んだ」なんて言わないで

「小池先生は往生した。向こう側に往つて、向こう側で生きています」

と言つてください。その通りです。肉体は滅びるよ。けれども、

「新しき霊体となつて生きる」

とパウロが言っているとおりのんだ。私が往つたら、

「万歳！ 小池先生、おめでとうございます」

と言つてくださいよ。

「どうもありがとう」

と、向こう側から返事するから（笑）。本当だよ。お葬式で「おめでとうございます」と言つたら、他のご連中はびっくりするだろうね。びっくりさせてあげなさい、いいから。

「あの連中は少し気違いではないか」

なんて。全く、気が違っているんだ。普通のとは気が違う。我々はそれくらいの熾んなる魂ですよ。

●上からくる希望

³然^{しか}のみならず患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、⁴忍耐は練達を生じ、

練達は希望を生ずと知ればなり。

ここのところは素晴らしいね。その通りです。この練達まで来ないで、ただ希望なんて言つたつてだめなんだ。そんなものは願望という。本当の希望というのは上からくるんです。願望ではない。希望なんだ。神・キリストから与えられた希望は、

⁵希望は恥を来^{きた}らせず、我らに賜^{たま}いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に

注げばなり。

そういう希望だから、聖霊によつて神の愛がやってくる。それが本当の希望です。この希望は必ず成就する。与えられた希望だからね。

⁶我等のなお弱かりし時、キリスト定まりたる日に及びて敬虔^{けいけん}ならぬ者のために死に給えり。⁷それ義人のために死ぬるもの殆ど^{ほとん}なし、仁者^{じんしや}のためには死ぬることを厭^{いと}わぬ者もやあらん。⁸然れど我等がなお罪人^{つみびと}たりし時、キリ

スト我等のために死に給いしに由りて、

我等がキリストをまだ受けとらない時に、キリストが十字架に架かり給いしによりて、

神は我らに対する愛をあらわし給えり。

贖罪の愛、我々の罪を贖つてくださった愛です。過去・現在・未来の我というものは全部贖われている。こつち側の何かではない。絶対恩寵だからね。「信仰によつて」なんて言つ



たつて、「信仰」がサムシングだと思つたらだめですよ。受けとることによつてです。「信仰」という言葉が躓きになる。「恩恵を受けとる」ことによつてです。信じ仰ぐではない。体受する、身体で受けとるということです。

⁹ 斯く今その血に頼りて我ら義とせられたらんには、まして彼によりて怒より救われざらんや。¹⁰ 我等もし敵たりしとき
神さまに逆らつていたときに、

御子の（十字架の）死に頼りて神と和らぐことを得たらんには、まして和らぎて後その生命によりて救われざらんや。

その通りです。「神と和らぐ」と言うよりも、「神の御意に従う」ということです。

¹¹ 然のみならず今われらに和睦^{やわらぎ}を得させ給える我らの主イエス・キリストに
頼りて神を喜ぶなり。

「神を喜ぶなり」とはその通りです。神さまはうれしい。

「主われらを愛す。われらもまた主を愛さん」という讃美歌があつたね。

パウロの書翰は素晴らしいですよ。仏教の方にはそういった中心の本はあるのかどうか知らないけれども。聖書ははっきりしているね。

